

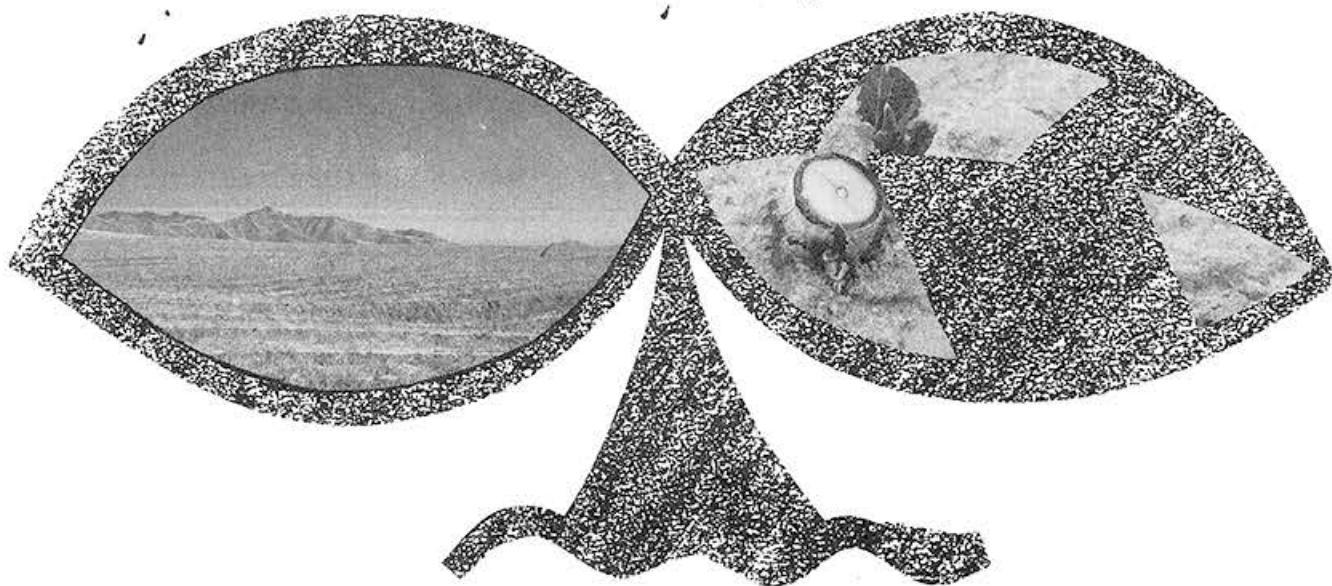
1975年2月28日第3種郵便物認可 1992年11月15日発行
毎月1回 15日発行
定価／150円
年間購読料／2,000円
(送料共)

編集／緑の地球ネットワーク(準)
Green Earth Network

大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739(番552)
郵便振替 大阪 4-128465
COM21 通巻304号 発行/COM企画室

緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



黄土高原に芽吹くポプラのひこばえ

1992・11

- 「環境NGOが元気になる話」(11・10講演会) P 2
- Overseas Report (中国・山西省/インド) P 4~5
- ネットワーカーズ P 6

10

自信を持つと、環境N G Oの役割

11・10 講演会 刺激的だった柳田耕一さんの話

11月10日アピオ大阪で、(財)緑の地球防衛基金の事務局長、柳田耕一さんをむかえての講演会を行いました。

会場の設営をしていると、緑色の山高帽に緑色のコートを着た人物が一人現れ、「誰かな」と思いきや、それが柳田さんで、このいでたちも何かのメッセージかなと思いつつ、挨拶をかわしました。

地球環境問題とはちょっと関係ないかなと思われる「タバコ」の問題を切り口に始まった話は、「環境N G Oが元気になる話」という演題どおりのとっても刺激的なものでした。

柳田さんの試算によると一年間に日本で吸われるタバコの量は、3230億本で使用される紙の量は30~40万トン、世界では5兆2000億本で、500万トンもの紙が使用されているそうです。第三世界での農業は換金を目的にしたモノカルチャー化が進んでおり、タバコ栽培のための耕地拡大とタバコの葉を乾燥させるために、毎年九州の面積に匹敵する森林が伐採されているとのこと。また火事の出火原因の第2位がタバコで、山火事による森林喪失、消防のためのエネルギー消費も無視できない。200万台もあるタバコ自動販売機の電気使用量もまた莫大。その上、肺癌等の予防・治療費などの社会的費



NGOが元気でなくては…と熱を込めて話す柳田さん。

用は4兆円に及ぶそうです。

環境に対する負荷ばかりか、タバコを吸わない人、特に青少年の健康を侵害する点ではまさに人権問題をもはらんでいて、アメリカ・ヨーロッパでは社会的規制がもはや当然視されている……。

——というタバコの話は、環境・人権・国際的視点にたった新しい進路を斬新に社会に提案し具体化していく仕事がN G Oに要求されている、という話の本題にダイレクトにつながるわけです。そして、国民国家の時代が崩れつつある世界で新しい原理原則を造り

だし得るのは、政府でもなく、ジャーナリズムでもなく、国連でもない。N G O以外にないのではないかと指摘されました。

アメリカやヨーロッパの環境N G Oが国家の政策の決定にまで大きな影響力を持っているのに対して、日本のN G Oはまだまだ非力です。とすれば、私たちも元気にならなければならぬのであって、やるべきことは山ほどあるわけです。今後のG E Nの活動に対する具体的なサジェストionもあり、大変参考になりました。皆さん頑張りましょう！

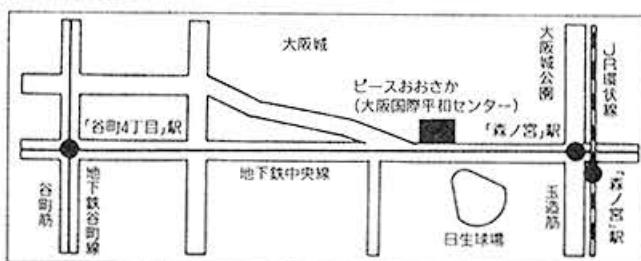
ピースおおさかでパネル展 黄土高原に緑を！

12月1日(火)~13日(日)

■入館料

	個人	団体(20人以上)
小・中学生	100円	50円
高校生	150円	100円
大人	250円	200円

■交通案内図

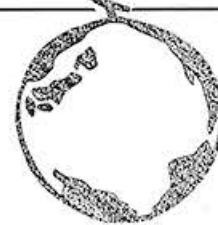


■開館時間

●午前9時30分~午後5時
ただし、入館は午後4時30分まで

■休館日

- 月曜日
- 国民の祝日の翌日



関西菌類談話会・下野さんのキノコの話に聞き入る参加者

70人参加 比良山ろくでキノコ狩り きのこ鍋に舌つづみ

「あった、あった、ここにもあった。でも食べられるかな」。緑の地球ネットワーク（準）は10月18日、滋賀県志賀町の比良げんき村で「きのこ狩りと秋の自然観察会」を開いた。

アウトドア・ブームのせいもあってか、募集定員を大幅に上回る70名が参加。若い女性グループ、幼稚園児の家族連れ、ナイスミドルのおばさんまで様々。登山帽にリュックサックと意欲満々の格好。ちょっと紅葉した比良山のふもとで、自分たちで採った「おいしいキノコ鍋」を味わった。

きのこ狩りを始める前に、関西菌類談話会会員で大阪府立枚方西高校生物

教諭の下野義人さんが、「白くてスマート、笠の下にツバがあり、根にこぶ状のつぼがあるのは要注意です。ドクツルタケなどは一本食べたら完全に死にます」と説明。

一時間の予定のきのこ狩りだったがやってみるといつの間にか夢中になり時間を忘れるほど面白い。一人で50本も採った人もいて、ややこぶりの松タケのようなものや、20cm以上の大物まで、様々なきのこが集まった。参加者はそれぞれの「勘」で「これは食べられる」と採ってきたが、ほとんどのきのこは下野さんの「ダメですね」の一言であっさりボツに。それでも赤褐

色に青緑色のしみのあるハツタケや、ややシイタケに似たヌイリイグチなど5種類ほどのきのこ約50本が合格。参加者が持ち寄った肉や野菜と一緒に鍋に入れた。

下野さんの厳しいチェックに合格したきのこばかりなのに、できあがったきのこ汁を前に参加者はちょっぴり心配顔。最初はおそるおそるハシをつけては一息。でも大丈夫とわかると現金なものでおかわりの続出。大鍋三杯分の汁はあつという間になくなってしまった。

昼食のあとは、下野さんを囲んでこの勉強会。「きのこの研究は遅れていて、図鑑に載っているのは2~3割。名前の付いていないものが三分の二以上。その中で、毒きのこの種類は少なく、日本にあるのは数十。しかし食べられるきのこでも寄生虫がすぐつき、マツタケでも腐りかけを食べると中毒します。格好はまったく同じなのに、ひだにキズをつけた時に出る汁の色が黄色か乳白色かで種類が違うものもある。今日食べたきのことよく似ているのをどこかの山で見つけても絶対に食べないでください。それで中毒になる人が一番多いんです」と下野さん。

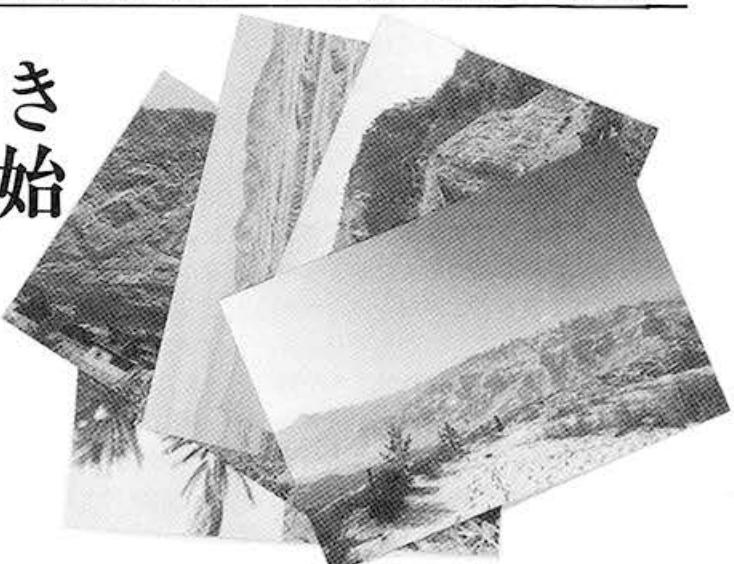
午後3時過ぎに解散したが、中毒者もせず無事終えることができ、参加者全員が自然に親しめた一日だった。

お待たせしました

絵はがき 発売開始

作成が遅れおりました絵はがきが、10日、できあがりました。黄土高原の風景、植物、などのカラー6枚組（写真）です。購入申し込みは以下の要領です。年賀はがき用にもご利用ください。お申込みはG E N事務局へ。

- 1セット（6枚）……… 300円
- 10セット以上………… 250円
- 送料は別料金です。





GENのみなさん！お元気ですか？私の方は、食事はもうひとつあわないので、いたって元気です。耳もだいぶ慣れてきて、若い人たちの話はちょっとずつ聞き取れるようになりました。とにかくよろこんでもてなしてくれるので、もう少し言葉ができるといいなと思っています。

10月7日から桑干河流域の懷仁県、陽高県、左雲県を3日間のかけ足でまわり、その後10日から14日まで懷仁県に滞在しています。15日から大同県徐町郷を回り、また渾源にもどる予定。

こちらに来たときは緑だった並木のボプラが、いっきょに黄葉し、バラバラと落ちはじめました。秋の深まりはほんとうに早いのです。

試行錯誤の経過も見えてきた

左雲県や懷仁県をまわっていると、せいぜい高さ3~4m、なかには1mぐらいに灌木化したボプラの林が道の両側を中心にものすごい広さに広がっています。1950年代に植えられたものが成長をまったくストップしてしまったのです。地元の人たちは「小老樹」と呼んでいますが、「小葉楊」というボプラで、水不足のためにそうなったようです。懷仁県だけでも、その面積は3万ヘクタールですから、建国直後にどんなに勢いこんで植えたか、またそれが大きく実ることがなかったかがわかります。

私たちの大先輩、遠山正嘆さんや城阪光弥さんに「山西省の緑化ができればたいしたものだが、そこは木が育たない」と言われて、以前はピンとき

山西省 Overseas Report

「小老樹」の下は黒い肥えた土だった 黄土地帯の緑化に確信

GEN世話人 高見邦雄

ませんでしたが、おそらくこうした状態を指しておられたのでしょうか。

しかし安心してください。そのすぐ横に10年前に植えられたボプラが直径30センチの太さに成長しているからです。品種の改良によって、人びとは水不足の問題をのりきり、新しい自信をもって緑化にとりくんでいるのです。

黄土層にはない黒い土に感動

「小老樹」の林でそんなことを考えながら、ふと足元をみると落ち葉がふ

ます。西留郷や徐町郷だけでなく、雁北地区一帯で樟子松を植えていますので、それらがここまで育ってくれたらどんなにいいか想像するだけでうれしくなります。これを見ただけでも今回来たかいがあったような気がします。

「桑干河青年緑化プロジェクト」は、これまで以上のスピードで進んでいます。ただ、資金不足は相変わらずの状態です。彼らは、この問題を解決するために現地に、自分たちで「苗圃」を建設する計画を立てています。今日と昨日とそこを見ましたが、懷仁県新家



1950年代に植えられたボプラ（小葉楊）の林。

りつもっています。スコップで掘ってみると、かなりの深さまで黄土高原ではまったくみられないよく肥えた黒い土です。30~40年のあいだ、そこに林があったという事実はたいへんなことなのです。現地の人たちは、この小老樹を徐々に果樹園やその他の樹種に更新する計画です。

渾源県北部の村を見たときにも、60年代にボプラを植えたけど、ダメだった、だから樟子松にしたんだ、という話が出ましたが、それはそういう意味だったようです。いまの植林体系ができるまでに、かなりの試行錯誤があったことがわかります。

懷仁県では樟子松の林を見ました。15年ほどたったもので、高さ3~4m、太さが10センチ以上になってい

園郷に200haの土地を確保し、整地をはじめたところです。93年以降スタートする予定の協力は、この苗圃を第一に考えてみてはどうでしょうか？

地元に密着した態勢も整う

また、この県は、来年5月から国内線の空路（大同空港）が開かれることになっており、地の利もえています。

来年からのワーキング・ツアーや受入れを、共青団雁北地区委員会でやりたいという提案があります。そうすればもっと地元に密着した受入れができるし、経費の面でもかなり安くできるということです。

それでは今回はこれで。GENの皆さんのお健闘を祈ります。

Overseas Report インド

タール砂漠をラクダ旅行 赤痢になって度胸がついた

学生会員 杉本大三



9月15日に、デリーよりインドに入りました。今インド北西部のジョードブルという町にいます。デリーでは赤痢にかかって、えらい目にあいましたが現在身体は絶好調。赤痢になってから妙に度胸がついてしまい、インド人の口にするものはたいがい同じように口にしています。世の中、死に到るような病気はそうそうないらしい。

話には聞いていたがインドの飯はカレーばかり。朝、昼、晩とカレーを食べています。米は長粒子米で、パサパサなうえに妙な臭いがあり、日本人の口にはとてもあいません。チャバティ（注=パン）ばかり食っています。一日の生活費はだいたい150ルピーというところでしょう。日本円にして750円、もちろん宿泊費を含んでいます。タイよりかなり物価が安い感じです。

町はきたない。ほこりっぽいえ、牛の粪がそこらじゅうに落ちています。町並みを眺めつつ歩いていたらしく、靴を粪の中に突っ込んで泣きをみるはめになります。身体中がかゆく、シャワーを浴びたいのですが昨日から私の泊まっているホテルはなぜか断水。一日30ルピーの安宿なので文句は言えないが多少腹が立ちます。

9月29日から10月2日まで、この町から西へ300キロ位の所にあるタール砂漠のまん中でラクダ旅行をしてきました。タール砂漠でのラクダ旅行はジ

ャイサルメールという町が基点になります。町にあまたある旅行代理店で、ガイド、食糧、らくだなど手配してくれるでとても楽です。

私は途中から一緒に行動している日本人と3泊4日のツアーに参加しました。らくだというのは人が乗るには非常に不向きな動物のように思います。上下動が激しく、走る時など50cmの階段を尻餅をつきながら落ちていくような感じです。特に2日目は午前中ずっと走り続けたのでつらかったです。食事はガイドが作ってくれます。衛生状態は一見非常に悪い。食器は砂で汚れを落としてからごく少量の水で洗い流します。調理に使う水は井戸水か溜まり水で、どれも濁っています。しかし砂漠という決定的に水の不足した状況ではこれ以上どうしようもありません。また砂漠に暮らす人びとはこうして生きているのだから多分それほど不潔ではないのだと思います。洗剤を使って食器を洗うのと、砂漠の乾燥した細かい砂で食器を洗うのとどちらがよく汚れを落とすか？残留する化学物質の人体への影響はどうか？などと考えると、私にはどちらが清潔なのか判断がつきかねます。

砂漠というと一面の砂原を思い浮か

べがちですが、タール砂漠は岩あり、石あり、灌木ありで、小さなスイカのような野菜もころがっています。麦畑があり、村もあります。私はこういう砂漠のほうが好きです。カラカラに乾いた大地の一画に葉の茶色になった麦が穂をつけているさまは壮絶でさえあります。

ガイドはブッダンという名前で、どうみても55～60歳ですが、年齢を尋ねると40歳だという。学校には行っていないが外国人ツーリストから英語を学び、むちゃくちゃだが何となくわかる英語をしゃべります。子どもは4人いて、彼の稼ぎは月1000ルピー。旅行者の感覚からすると一家を養うに足る収入ではないように思えるのですがどうなんでしょうか？しかし、とにかく大変な旅行でした。

下痢は全く大丈夫でしたが、背骨と内股がぎりぎり痛みました。ホテルに帰ってから3泊4日のコースを行ってきたというと、ほかの白人旅行者が尊敬してくれました。

これからデカン高原を旅行したあとデリーを経てカルカッタに向かい、ネパールに入る予定です。GENの皆さんもお元気で。（10月6日、ガンジーの故郷、アーマダバードにて）



人と車と家畜でごったがえすニューデリーの街角



「みなさーん、グループで輪になつてください。それから正面を向いて両手を前に出して手をつないでください。手をはなさずに大きな輪をつくりましょう。」玉山さんの元気な声がとぶ。「A SEED KANSAI」が開いたワークショップ・開発教育ゲームのひとこまである。

こうしたゲームのやり方を、玉山さんはアメリカの環境NGOのワークショップに参加して実地に学んできた。手で触れ、身体をくっつけあうことでゲームを通してお互いの連帯感を高めていく。いま環境問題に取り組む若い人たちの間で急速に広まっている。

「私はほんといろんな人と友だちになりたいんですよ。地球サミットに向けて人の輪をだんだん広げていくうちに、いつの間にかA SEED KA

NSA Iができあがっていったという感じなんです。」と玉山さんは言う。

この人と話していると、少しも組織や運動を感じさせられない。公私混同というと悪く聞こえがちだが、公私の間の「共」の部分をつむぎだすのがとてもじょうずだ。環境問題は間口が広いだけに、どちらかといえば「違う」のほうに目が向きやすいのだが、この人の場合はそれがない。

「私はあまり人との対立点を際立たせるというのは好きでないし、闘って相手を支配しようというようなことはほんとに好きではないんです。」と言われると、何だかほんとにその気にさせられてしまうから不思議だ。

その一方で、運動や組織のあり方にについてもしっかりした自分の意見を持っている。「ネットワーキングはとて

玉山ともよさん (23歳)

桃山学院大学を今春卒業し、現在、甲南大学に研究生として在籍中。ア・シード・関西（環境と開発、平等と協働のための国際行動・関西）の創立者一人。ニックネームは「タマちゃん」。

「A SEED JAPAN」は、昨年9月に結成された若者たちの環境ネットワーク。自分で考え、自分で行動する若い人たちの自由な組織として東京で誕生した。

も手間がかかると思うんですね。『ア・シード』でもサミットの後、新しい人たちが積極的に参加してくるようになって、組織というか会そのものをきちんとした規約を持ったものにしようという意見がでてきて、やはりつくらなかんのかなーと悩んでます。私はもっといいかげんでいいんちゃうかという思いがあるんですね。」と。

若い人たちの中にこんな素敵なネットワーカーがうまれていてそれを喜びたい。タマちゃんがんばって！

山西省の自然

石原忠一
(第一次緑化協力団団長)

④華北落葉松

(カホクカラマツ)

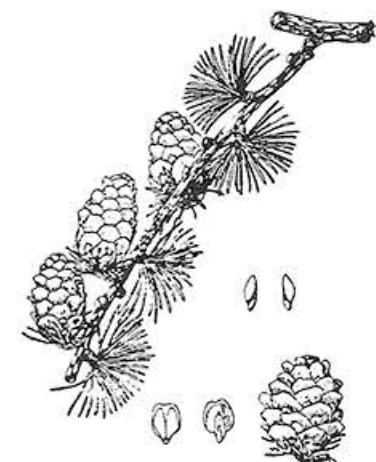
延暦寺の天台座主円仁(えんにん)が、自ら歩いた日々を筆記した「入唐求法巡礼行記」の中に、840年(承和7年、唐の開成5年)旧暦4月28日、「平谷に入りて西行30里、中台(山西省五台山の一つ)を望見す。五頂は円高にして樹木を見ず、状は銅盆を覆せるが如し。短草は彩を含み、遙かに望んで之を観れば、夏中の秋色なり」とあります。

北緯39度、3000m前後の五つの山頂は、いずれも森林限界をこえて草原になるという生態系の記述です。さすがにみごとな観察眼です。これは、その450年後、マルコ・ポーロが「東方見聞録」のなかにおいても述べなかっ

たことです。

私たちも5月11日(旧暦4月9日)よく晴れた冷たい東台頂(標高2500m)の峠を越えました。日陰には残雪があり、枯れた花の穂が足元の草に点々と残っていました。さぞや夏場は一面のお花畠になることでしょう。この峠の北斜面は、みごとな落葉松と雲杉が谷間から森林限界いっぱいまで、だんだん背丈を低くしながらすき間なくおおいつくした美しい森林となっていますではありませんか。

翌日、恒山(2017m)の中腹へ油松の植樹にでかけたとき、渾河上流の7年前に植樹した落葉松の斜面に案内されました。落葉松に折尺をあててみると



と、去年一年間に成長した若い幹は70センチも伸びています。浅い緑のやわらかい葉が束になって枝につき、五月の小雨に濡れて、葉先の水滴が水晶のように輝いています。林業局長の温增玉さんは「1700mをこすと、この華北落葉松でなくては……」と自信たっぷりの笑顔で語りました。



但馬の山村で援農体験

喜多亮夫（大学生）

先日、「緑の地球」6号にお話が載った但馬の大森さん一家にお邪魔して農作業の手伝いを一日だけやらせていただいた。日曜だというのに仕事は山ほどあって、夕方には体がガタガタになるくらい疲れました。

やってみて思ったのは、ここには駄がないということ。畠の雑草や収穫物の人が食えない部分は鶏や豚が食べてくれる。そしてその糞から堆肥を作れば田や畠が肥えて次の収穫を約束してくれる。こんな完全な循環があってそこで人間はこの自然の循環を助けるというより、その一部となっていて、「人間がいる自然」が農村の本来の姿なんじゃないかなと、偉そうにも思いました。また訪ねたいと思います。

ホームパーティで 緑化基金カンパ

10月末の土曜日の昼下がり、ピアノやバイオリンの演奏を楽しみながら秋のひとときを過ごそうという、お洒落なホームパーティが開かれました。

このパーティを企画したのはSさんとその友だちのYさん。GENの会員でもあるSさんは、幅広いネットワークの持ち主で、これまでいろいろな催しを考えるときに最初に相談をもちかける人のひとり。その良き相談相手の彼女から、「会費の一部を緑化基金にカンパしたいので説明もかねて参加してよ」といわれて、この日を楽しみにしていました。

場所は宝塚のTさん宅の洋間。紅葉しはじめた木々に囲まれた静かな住宅地。集まっているのは8人ほどの男女。もちろん、Sさん以外は初対面の人ばかり。しかし、パーティが始まって、Tさんが用意してくれた手作り料理をつまみながら、ピアノやバイオリンの演

奏を聞くうちに、すっかり打ち解けた雰囲気に。私もおぼえたての「開発教育ゲーム」を披露してみたが、珍しさもあってよろこんでもらえた気がします。日本でもこうしたパーティはごく普通に開かれるようになったんだなーと妙な感心をしながら、またこんな企画に参加したいと思ったものでした。

楽しい時間を過ごさせていただいたうえ、カンパもいただき、Sさん、Yさんどうもありがとう。（T）



学園祭で募金活動

北野恵美（語学専門学校生）

一個の人間と知り合い、その人を通じて違う分野の人たちと出会っていく。私は、語学学校でコミュニケーションとしての英語を学んでいることもあって、日頃から外国の人たちはもちろん、自分とは異なる価値観、感性や知性を持った人たちと会える機会に恵まれています。この「緑の地球ネットワーク」を知ったのも、そういう縁がきっかけでした。

今、私たちの未来の地球に対して、決して楽観視できないということをよく耳にします。このことを痛感し、いくら環境保護活動や国際協力に関心がある（特に学生にとっては経済的、時間的な問題で）自分には何もできないと思われがちです。

そこで、11月に予定されている私の学校の学園祭で、「社会に対する矛盾を感じながらも、見失いがちな自分の生活から脱出して、言葉ではなく挑戦し、行動しよう！」をテーマに、私た



ちのできる形で環境保護運動をしようと決めました。

具体的には、GENから写真パネルを借りて展示し、バザーなどをしたその収益金をわずかではあるけれども環境保護に役立てようと、募金活動をすることにしました。

学園祭という自己表現の可能なステージで、環境保護という意義ある目的を達成するために、みんな、今とてもやる気になっています。

古今東西を問わず、出会った人たちと共に、生きている間にめいっぱい今できることをやり続けていれば、未来を憂うことなく、この地球をいつまでも継いでいけると、私は思っています。

『自然と親しむ会』 の スタッフに なりませんか

「緑の地球ネットワーク」では2か月に一回、自然の中で身体を動かし、汗を流して、森林の自然や林業などを体験的に学んで行く「自然と親しむ会」を続けてきました。今までにはヒノキの植林、間伐材と木工細工、キャンプ、キノコ狩りをやりました。毎回子ども連れも含めて30~40人の参加で楽しくやっています。今後もいろいろな方面を開拓して体験していく予定です。行事の企画、準備、運営にあなたの力を発揮してみませんか。ぜひスタッフに参加して下さい。一緒にやりましょう。

私の本棚

『C・W・ニコルの黒姫日記』

C・W・ニコル 著 竹内和世訳

講談社文庫 400円

エコロジストとしても有名なC・W・ニコルさんの最新文庫版エッセイ集です。

読みやすい大きな活字で、ユーモア

とウイットに富んだこのエッセイ集は読者を思わずニコルさんの住んでいる信州・黒姫の世界へ誘います。

そして全編を通じてワイルドな文体は、時として辛口ですが自然や動植物に対する温かい愛情に満ちています。

彼は、この本の中で私たち日本人にこう警告しています。「森の主は樹である。その根は地面を守る神の手にはかならない。……人間どもの無分別な

破壊に、山が怒りだしている。」と。

大資本主導によるゆがんだ「自然=ゆとり」ブームも問題ではないでしょうか? ゴルフ場やスキー場など、リゾート乱開発によって無残な姿となりつつある日本の自然。それに乗せられ知らず知らずのうちに環境破壊に手をかしてしまっている観光客……。私たちの身のまわりから、環境問題を考えさせられる一冊といえます。 永園浩之

年末一時金からGENへカンパを

GEN(準)会員のみなさん、「緑の地球」読者のみなさん。今年1月に発足した緑の地球ネットワーク準備会も早いもので、やがてまる一年を迎えようとしています。

来年4月には準備会から飛躍して正式発足にこぎつけようと、この年末、さまざまな活動に意欲的に取り組んでいます。

皆さんのお協力おかげで、中国・

山西省の緑化協力は順調に進展し、来年からは新たにネパールでの協力も具体的に着手する予定です。

つきましては結成に向けての準備資金と来年の緑化協力資金を確保するために、年末一時金カンパにご協力くださいますようお願いいたします。

不景気の折、何かと大変かと思いますが、後日、詳細を文書でお送りしますので、お力添えをお願いします。

『GEN朝まで討論会』のお知らせ

いつ参加して、いつ帰っても結構というザックバランな討論会です。

来年4月の正式発足に向けて、会員のいろんな考え方や意見をぜひぶつけたいものです。「朝まで討論会」とは古いネーミングですが、中味は各自自由にテーマを持ち込んで大いに議論をわかせていただきたいと思います。参加申込を逐次受付ています。

〔場所〕日中友好の家(阪急宝塚線・山本駅下車、徒歩5分)

☎0797(88)2240

〔日時〕12月12日(土)午後3時～翌13日(日)正午まで

〔費用〕実費(食事もできます)

〔呼びかけ人〕川島和義(世話人)

〔連絡先〕緑の地球ネットワーク

事務局☎06(583)1719

ポンカンをどうぞ

高知県の田中隆一さんから「甲の浦ポンカン」の産直販売の案内が届きました。田中さんは以前から化学肥料や除草剤を一切使用しない有機栽培によるみかん作りをしており、GENの会員でもあります。これまで購入されたみなさんから大変ご好評をいただいています。今年もポンカンは豊作で味の方もなかなかということです。注文は直接下記の田中さん宅へ電話かFAXでお願いします。尚、出荷は12月10日頃から明年3月初旬まで。

●連絡先 高知県安芸郡東洋町甲の浦
田中隆一 電話・FAX 08872-9-2500

3kg(約20個)	2L, 3L	2500円
5kg(約30個)	〃	3500円
3kg(約35個)	L	3000円
5kg(〃)	〃	3300円

※いずれも贈答用は300円増し(3kg箱入りは贈答用のみ)です。
※送料は別途負担。関西方面は620円です。

編集後記



●秋から冬へと変わりゆくこの季節、皆さんはどうお過ごしでしょうか。

紅葉の便りが届いたかと思うと、初雪の便りが届き、日本の四季のうつろいの素晴らしさにはただただ感嘆するばかりで、言葉にできません。私は時々、和泉葛城山系にでかけま

すが、自然の恵みの大きさに行く度に心が洗われる思いで帰路につきます。

さて8号に続き、今号で2回目の編集。最初は軽く手伝うつもりでいましたが、何だかすっかり気分は編集長。もともと本職が印刷出版関係なので、今回は友人のレイアウト・マンに手伝ってもらって、前回よりは幾分レイアウト重視で編集させていただきました。これからもいろいろとくふうしながら編集活動に参加していくつもりです。皆さん、よろしくお願い致します。(永園茂樹)

●低迷巨人軍に長嶋監督。野球のほうは、それで面白くなるのかどうかわかりません。でも「緑の地球」は面白くなったともっぱらの評判。わが編集部にも強力スタッフが加わり、「表紙が変わった」「読みやすくなかった」とのはげましをいただいている。新しい若いスタッフがどんどん参加して、いつも変化に富んだドキドキする紙面が作れたら楽しいと思うのです。いまのところ参加する人すべてが編集長ですし、これからみんなで編集部を作っていく計画です。もっと参加を!(T)